一関の四季彩

願い込め袋奪い合う

藤沢・長徳寺「蘇民祭」

「ジャッソー」の掛け声が静かな山里に響き渡る。裸男たちが、護符の入った麻袋を奪い合う。

藤沢町保呂羽の長徳寺（渋谷真之住職）で3月2日、不動明王の鎮座120年を記念して蘇民祭が行われ、無病息災、五穀豊穣、震災復興などを願った。

奥州市の黒石寺や花巻市の胡四王神社の各蘇民祭の保存団体の協力を得て行われた蘇民袋争奪戦（袋ねじり）には、地元のほか東京や京都などから46人が参加。下帯姿の男たちは、体をぶつけ合いながら境内を巡って争奪戦を繰り広げ、寺から約500メートル下った雪深い田んぼで決着が付いた。

取主は奥州市水沢区の石川光夫さん（36）。黒石寺蘇民祭の取主でもある石川さんは「120年の節目に取主になり、うれしい」とにっこり。準取主の畠山真さん（35）＝紫波町＝は「小さい集落なのに、こんなに大勢の人で盛り上ってすごい。これからも続けてほしい」と期待を込める。3位の畠山克宏さん（45）＝藤沢町＝は主催した同寺不動尊精進講本部青年部長。「多くの人に支えられ、この日を迎えられた」と感謝し、「少子高齢化が進む中、他の地域の人たちと交流することで保呂羽を元気にしていきたい」と前を見る。

実家の母親から誘われて宮城県名取市から訪れた齊藤外二さん（64）、あき子さん（59）夫妻は「蘇民祭復活は聞いていた。すごい熱気で迫力があった。春に向け、もっと頑張ろうという元気をもらった」と話していた。

蘇民祭は、花泉町油島の満昌寺から不動尊を譲り受けた1894（明治27）年に始まったとされる。今年は鎮座120年を記念して、不動明王胎内秘仏が50年ぶりに開帳された。同日は、花泉町油島の「餅つき隊」も駆けつけ、約6升の餅をついて振る舞った。

渋谷住職は「120年祭を成功させようという皆さんの思いが一つになった。すごいパワーだ」とねぎらう。同寺不動尊精進講本部の伊藤初男本部長は「祭のないところににぎわいはない。にぎわいがないところに発展はない」と言い切り、「連帯意識が希薄になっている今、老若男女が互いに助け合いながら祭を成功させた。今後も地域おこしにつながるような祭を続けたい」と来年を見据える。

同寺は、日常的に保呂羽地区民が出入りするよりどころ。寺を拠点にさまざまな活動が繰り広げられており、本堂には地元の女性たちが手作りした「つるし雛」が飾られ、祭に彩りを添えた。

2_雉子川で体を浄める「水垢離」（みずごり）
3_鬼面を逆さに背負った鬼子（数え7つの児童）が行列をなし、本堂に入る「鬼子登り」
4_柴、たきつけ、ごま殻、塩を持った行列が腰をかがめて進む。井桁に積み上げられた焚場（たきば）に点火。その上で裸男たちが浄火を浴びる「柴燈木（ひたき）登り」

1,5,6,7_鬼子が本堂に戻ると、袋出しと呼ばれる男たち数人が蘇民袋を抱えて外へ出て、いよいよ争奪戦が始まる。小間木と呼ばれる疫病の護符が入った蘇民袋が小刀で裂かれ、中の小間木がこぼれ落ちる。集った男女はその小間木を拾ってお守りとする。裸の男たちはさらに空になった袋の争奪戦を繰り広げ、境内の外になだれ出る。激しい取り合いは寺から500㍍下った田んぼで決着。袋の首の部分を握っていた石川光夫さんが今年の取主になった

8_蘇民袋争奪戦に参加した男たち。前列左から3位に入った地元藤沢町の畠山克宏さん、取主となった奥州市の石川光夫さん、準取主の畠山真さんは紫波町から参加

9_花泉町油島の餅つき隊が6升の餅をついて振る舞った
10_本堂に飾られた地元女性たちの手作りによるつるし飾り

11_長徳寺の渋谷真之住職
12_長徳寺不動尊精進講本部の伊藤初男本部長
13_名取市から訪れた齊藤外二さんとあき子さん